

『臨床の知とは何か』

中村雄二郎著／岩波新書

私が哲学者、中村雄二郎氏のお話に直接触れたのは20年前のファジィ関連の学会の「新しい知としてのファジィ」に関する企画におけるご講演であった。当時、1965年にL.A.ザデーによって提唱されたファジィ理論は、人間の定性的な知による機械制御の方法を産業分野で製品やシステムに埋め込むのに有用なツールとして展開され、ブームになったが、本企画は、そのことの根源を人間の知における新たなパラダイムを開くための一つの突破口と考えたいという思いからであった。

当時、中村雄二郎氏は新しい科学認識論を「共通感覚」や「臨床の知」として展開されておられたのだが、「ファジィ」が提起した問題と深くかかわっていると考えられたとのことだった。ファジィ理論は「あいまい集合論」として登場し、厳密な帰属性を論ずる集合論、2値論理を基盤とする近代科学的な思考法に、疑問を投げかけたととらえられたのかと思われる。

この招待講演の後、まもなく出版されたのが『臨床の知とは何か』であった。その著書の中で述べられている基本的な問題意識は、「近代技術文明を牽引してきた科学の知は、普遍主義（事物や自然を等質的とみなし、すべてを量的なものに還元することで、地域、文化、歴史を超えられる）、論理主義（事物や自然のうちに生ずる出来事は、すべて論理的な一義的因果関係で成り立っている）、客観主義（事物や自然を扱う際に、扱う者の側の主観性をまったく排除して、対象化してとらえる）の3つの原理に基づいていたが、それらが人類にもたらしたものは、自然破壊、環境汚染であり、人間の生活環境は、自然的にだけでなく、社会的にも精神的にも危険に充ちたものであった」との捉え方である。その上で、「臨床の知」として、科学の知の3原理と対をなす、「コスモロジー（場所や空間を、一つ一つが有機的な秩序、意味をもった領界とみなす）」、「シンボリズム（物事をそのもつさまざまな側面から、一義的ではなく、多義的に捉え、表わす）」、「パフォーマンス（行為する当人のわが身に相手や自己を取り巻く環境からの働きかけを受けつつ、自己のうちに受動的、受苦的な在り様を含みつつ、相互作用的に行為し、行動する）」を構成原理としたもう一つの対照的な知を際立たせたのであった。

私自身、人間工学分野で研究してきたものであるが、この「臨床の知」に出合った当時、あいまいで主観性が鍵となる「感性工学」に関心を持ち、快適性や質的

印象などを重視するモノ造りやモノの選択支援システムの研究に取り組んだ経験がある。最近では地球温暖化問題はもちろん、脆弱なネットワーク社会がもたらした新たなサイバー犯罪・社会不安、そして昨年秋に顕在化した金融危機などに対して、地域や文化の固有性を尊重し、人間の多様な見方、主観的な叡知を生かした、問題解決の道筋をクローズアップすることが不可欠と考えている。身体を介したヒト・モノとの相互作用や経験を通して獲得した暗黙知を踏まえ、「臨床の知」の諸原理に着目し、それを人間の感性的な諸相でとらえて工学的なアプローチに埋め込めないかと考え始めているところである。

大学という知の最高学府に身をおく機会を得た学生のみなさんにも、「現代に求められる知」とはどのようなものなのか、本書をきっかけに考えてもらえれば望外の喜びである。

執筆者紹介

中村 和男

経営情報系教授。専門領域は、行動科学、人間工学、認知心理、システム科学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『臨床の知とは何か』中村雄二郎著 岩波新書 1992年 777円

ブックガイド目次へ